

## 中国都市における余暇空間に関する人文地理学的研究

石田 曜

中国では経済発展による自由時間の拡大を背景に、余暇への関心がますます高まっている。大衆消費社会へ突入して以降、レジャー産業の発展や消費行動が多様化する中で、人々の余暇をめぐる環境は大きく変化してきた。すなわち、中国は今、物質的な欲求から精神的な充実が求められるという転換期に差し掛かっているといえよう。このような背景から、中国都市における人々の日常生活の余暇の過ごし方とそれに関係する空間を様々な視点から検討する必要がある。

これまで余暇については社会学や建築学、地理学などの様々な分野によって研究が深められてきた。特に、欧米及び日本の研究では、余暇に関して、その資源や時間利用、活動、価値、消費、政治性、差異などに着目して研究業績が積み重ねられてきた。この中で、人文地理学は計量的および記述的な分析によって、圏域や分布、行動空間、経験、実践、グローバル化の中の余暇の位置付けなどを明らかにしてきた。近年では、観光空間について、その社会的・文化的コンテキストに注目した研究が多くみられる。中国においては、その研究動向は日本と類似しており、計量的な分析が主流である。一方で、両国ともに余暇空間の形成過程や余暇活動を実践する人々の経験および意味に踏み込んだ研究は管見の限りほとんどないといってよい。そこで、本論文では中国東北地域（以下、東北地域）の都市公園を対象として、人文地理学的視点から都市公園が余暇空間としてどのように形成され、また、そこで余暇活動を行う主体がこの余暇空間をどのように認識しているのかについて、その形成過程に着目して明らかにすることを目的とした。

実際に、中国の都市を歩くと、ひととき人々が楽しそうに談笑したり、踊っていたりする場面を幾度も目にする。余暇活動に参加する人々は、どのような環境や社会的状況の中で、そのような生き生きとした余暇空間を構築し、またその空間に対してどのような意味付けを行っているのだろうか。その実態は政府などの管理主体が中心となって設置した施設に、人々の余暇活動が配置されているだけなのであるだろうか。あるいは、人々の余暇活動という実践は政府のロジックへと介入しているのか。そこにみられる相互作用はどのようなものなのか。このような疑問を抱きながら、主に高齢者を対象に考察を進めてきた。

上記の問題意識から、第1章では、余暇空間を議論する上で、余暇活動と空間に関する人文地理学や諸人文—社会科学によるアプローチを整理した。ここでは、既存研究から、これまで余暇空間がどのように研究されてきたのかを検討し、その論点を確認した上で、より具体的に本研究の問題設定を提示した。

第2章では、吉林省長春市南湖公園において、人々の余暇活動の実態を明らかにした。具

体的には、どのような属性の利用者が南湖公園へ来園し、またこの公園ではどのような余暇活動が展開されているのかを明らかにした。結果、来園目的では、「運動」項目が半数弱を占めたのに対し、その選定理由の多くが「風景・環境の良さ」であることから、人々が活動の場所として選定する際、景観が大きな役割を持っていることが明確となった。また、移動時間に関しては、大多数が 20 分程度であり、これは年齢層別にも同様であった。さらに語りの分析から、南湖公園の来園者には、仕事場や家庭におけるプレッシャーからの開放を目的としているものや、家に居てもすることが無いといった人々が存在することを確認できた。

第 3 章では、吉林省松原市を事例に、余暇空間としての都市公園の特性を明らかにした。具体的には、鏡湖公園・児童公園・伯都訥（ボドナ）文化公園の 3 つの都市公園を取り上げ、それぞれがどのような背景において建設され、またそこでは、どのような余暇活動が展開されるのかについて、その形成過程を追いながら考察した。結果として、特に鏡湖公園と伯都訥文化公園は、市政府による緑化やクリアランスなどの「開発」という政治的戦略の影響を強く受けていた。このことは、松原市が新興都市であることから、都市のアイデンティティを獲得する上で、都市公園がその「開発」の対象となったと考えられる。一方で、余暇活動を実践する人々は、そのような戦略からはほとんど影響を受けず、独自の嗜好やアイデンティティに即して都市公園を利用していることを示した。

第 4 章では、吉林省延吉市を対象に、都市公園が余暇参加者にとってどのような空間であるのかを考察した。具体的には、余暇参加者の語りから、彼らが延吉市の都市公園の変容についてどのように認識されているのかを分析した。結果は次の通りである。まず、人民公園では無料開放以降、高齢者たちは以前に単位内で行っていた余暇活動を持ち込み、園内で展開していることが明らかになった。また朝鮮族について、彼らは韓国への出稼ぎに際して、農村を離れ、帰国後に都市に移り住む。そのような人々は、帰属するコミュニティを持っていないため、公共空間の役割を果たす都市公園や広場に集まり、余暇活動を通して新たな関係を構築する。このように都市公園は余暇活動だけではなく、居場所を与える役割を果たしていた。また、青年湖公園について、公園の改造による消失という出来事を取り上げた。青年湖公園は政府によって「古臭い」などのレッテルが貼られることによって、取り壊しが決行された。しかし、余暇参加者は青年湖公園の消失前後のそれぞれの姿に愛着を抱いていることが明らかになった。また、そこには政府への不満などの葛藤は見られないことを示した。

第 5 章では、瀋陽市中山公園を事例に、余暇参加者を指導者と参加者に区分し、そこに公園管理者（以下、管理者）を加えることで、合計 3 つの主体が余暇活動や空間をめぐる、どのような葛藤と協働の中で、余暇空間を構築していくのかを考察した。さらに、その余暇空間へは各主体によってどのような意味が込められているのかを明らかにした。本章で得られた知見は以下の通りである。まず、中山公園における余暇活動に関する状況の転換は、2004 年の無料開放によるものであった。それ以前の中山公園は鉄柵や塀、大門によって周囲を囲まれ、チケットを購入して入園する観光地のような空間であった。しかし、無料開放

によって大衆的な余暇活動が入り込んできた。その結果、中山公園は、管理者が優位であった余暇空間からの質的転換を求められることとなった。管理者の認識から、無料開放以前は緑地やアトラクションの整備といったハード面の管理が主な仕事であったが、無料開放以降は、余暇グループ同士の活動の時間と空間をめぐる葛藤の仲裁を行うといったソフト面についても対応する必要が生じたことが示された。このように余暇活動の時間と空間は管理されるだけでなく、指導者と管理者の協働によって構築されていることを明らかにした。また、参加者は、そのように生み出された余暇空間に対して、独自の意味を付与していることを示した。

そして終章では、本論文のまとめと展望を述べ、既往研究に対する貢献を次の 3 点とした。第 1 に、都市という環境に着目し、東北地域の余暇空間としての都市公園の特性を明らかにした。第 2 に、余暇活動を実践する人々の経験や意味まで踏み込み、余暇参加者の語りから、余暇の場所についての実態を明らかにした。第 3 に、余暇参加者と管理者という各主体が、余暇活動や空間をめぐる協働の中で、余暇空間を構築することを明らかにした。一方、本論文では事例が東北地域に限定されていること、余暇参加者と管理者という主体に着目したが、更に高次元の政策などを含む権力との関連性が検証されていないことの 2 点が課題として残された。